



新年のご挨拶

～文科省の不退転の決意と奈良医大の進むべき道～ 理事長・学長 細井 裕司

明けましておめでとうございます。

本年は本学創立70周年の記念すべき年にあたります。単に70周年というだけでなく、キャンパス移転を契機に大きく飛躍し、真にトップ10の医科大学になる礎を築く大切な年です。今回は大学を取り巻く事項として、文科省の不退転の決意について述べ、次いで昨年私が理事長・学長に就任して以後行ってきたことを踏まえて奈良医大の今後について展望したいと思います。

1. 文科省の不退転の決意

～学校教育法の改正と各大学に対して主旨徹底の指導～

文科省は昨年学校教育法、国立大学法人法の改正を行い強い決意で大学改革を断行しております。奈良医大においても文科省の強力な指導のもと、学則等の改正作業を行っています。

1) 文科省の不退転の決意の経緯

平成16年文科省は国立大学を法人化しました。そしてそれに続いて多くの公立大学も法人化されました。「国立大学・公立大学の法人化で旧態依然とした大学が改革され、世界の大学に負けない姿になる」と期待されました。しかし、多くの大学の教授会において、改革しようとする学長や執行部に対して、改革に反対する一部の教授が声高に「自由な意見が言えなくなった、民主的でない、学長の独裁」などと言って改革を阻害したのです。その結果、全国的に改革は進まず、世界における日本の大学の地位が低下していくことになりました。

改革を進めようと努力されてきたある文科省関係者は、「自由な意見が言えなくなったと言うが、単に反対する意見は本当の意見ではない。建設的な意見、対案を出すのでなければ何時間意見交換しても意味がない。学長の独裁というのは改革反対の一部の人達によってよく使われたレッテルである。このレッテルで改革をつぶした例は多い。」と言われ、今度こそ不退転の決意で臨むと表明されていました。

2) 頻回の講演会による法の主旨の徹底と指導

文科省は法律を制定しただけではなく、国公私立775校を文科省に集め、法の主旨の徹底と学則を法律に適合させるように指導しました。その後も頻りに説明会を開いています。奈良医大においても、昨年9月9日に役員・教授を対象に文部科学省高等教育局大学振興課の里見課長

の講演がありました。この内容は一斉メールや学報第50巻(2014年10月)でもお知らせしていますが、文科省の施策を受けて全国の大学でこの方針に沿って作業が進められており、奈良医大にとっても重要事項となりますのでその内容を以下に再掲します。



「大学のガバナンス改革の推進について～学校教育法の改正をうけて～」
里見課長講演要旨(平成26年9月9日)

○大学で行うべきガバナンス改革

- ・大学のガバナンス改革を推進するためには、学長のリーダーシップの確立が重要であり、学内の仕組み(学則、規則等)を法令に沿って見直す必要があること

○権限と責任の一致

- ・権限と責任の一致の原則から、大学運営について最終的な責任を持つ学長が、校務についての決定権を持っていること

○副学長の任命

- ・副学長については、学長のビジョンを共有できる者でなくてはならず、この主旨から学長が任命するものであること

○教授会の役割の明確化

- ・教授会(会議)は決定機関ではなく、教育研究に関する事項について、学長が決定を行うに当たり、審議或いは意見を述べることができる機関であること

ただし、学長は、教授会の意見に拘束されるものではないこと

- ・審議とは、議論することであり、決定権を含まないものではないこと

○学長の選考

- ・学長の選考は、人格が高潔で、学識に優れ、教育研究活動を適切かつ効果的に運用できる能力を有する者のうちから、学長選考会議が定める基準により行わなければならないこと

- ・高潔とは、社会的に信用がおけるといことであり、社会的に批判を受けるような犯罪的行為を犯したことがないこと

- ・学長の選考は、学長選考会議がその権限と責任において主体的に行うべきこと

- ・意向投票の結果をそのまま反映させるなどの方法は適切ではないこと

Contents

新年のご挨拶 ～文科省の不退転の決意と奈良医大の進むべき道～ 1～2

■叙勲受章者のお知らせ～心からお祝い申し上げます～

■奈良医大軽音楽部 The Hard Stream Orchestra が「Kimono Jazzg」に出演しました 2

■第45回アステラス病態代謝研究報告会で優秀発表賞を受賞しました

■第12回日本時間生物学会で学術奨励賞を受賞しました

■平成26年度医学教育等関係業務功労者表彰 3

■平成26年度白樺生祭のご報告

■Student Doctor 認定証授与式

■高大連携教育を推進しています 4

■独立行政法人産業技術総合研究所と連携・協力に関する包括協定を締結しました

■ベトナムのトゥアティエン・フエ省の人民委員会副委員長が来学されました 5

■総合防災訓練を実施しました 6

市民公開講座「子どものころを育てる大人の関わり方～自己肯定感と共感性を考える～」を開催しました

■なかよし保育園で園児向け防犯教室を開催しました

■絵画を寄贈いただきました 7

■高度医療技術修得者を養成しています

■がん化学療法医療チーム研修会を開催しました

■病院玄関口に新たに路線バスが乗入れました 8

■クラブ紹介 9

■短時間勤務職員制度を拡充しました

■平成26年度(下半期)若手研究者国際学会発表助成事業 助成者決定

■平成26年度 中島佐一学術研究奨励賞の募集 10

■図書館だより 11

■研究紹介 12

■奈良医大教養文庫を設置しました

■新技術説明会にシーズを発表しました

■産学官連携だより 13

■奈良県立医科大学・同志社女子大学学術交流に関する包括協定に基づく第8回公開シンポジウム「認知症の治療と予防の最前線」を開催しました

■漢方薬シンポジウム2014を開催しました 14

■平成26年度 外部資金獲得状況 15～17

■部門紹介(C病棟7階・C病棟8階・精神医療センター) 18

■公開講座「くらしと医学」開催のお知らせ

■レポート 19

メディア掲載情報/掲示板/編集後記/広告

3) チェックリストによる法の主旨の徹底と指導

大学における内部規則・運用見直しチェックリスト(学校教育法の改正関係)が文科省から送付されており、本学においても法の主旨に適合するように学則等の改正を進めています。

2. 本学での取り組みと今後の展望

昨年から大きな飛躍をするための準備を行って参りました。そのうちのいくつかを以下に示します。今年以降もこのような改革を続けて参ります。

1) 理にかなった大学運営と品格ある大学の推進

奈良医大のすべての教職員が利他の精神で、一般良識人から「理にかなっている」「正しいことを行っている」と評価される行動をとることによって、世間から尊敬される大学になることを推進してきました。

①組織改革・意識改革

- ・教養教育部門の新設(医学科・看護学科の一般教育組織の統合)を決定しました。
- ・内科学講座合同運営会議を理事長のもとに運営組織として設置しました。
- ・看護学科に在宅看護学領域を新設することを決定しました。
- ・大学院の重要性を若い医師に説き、多くの教授の協力を得て大学院の受験者数が52名(定員40名)に増加しました。

②教授選考方法の改革を行いました。

③奈良医大の卒業生の臨床英語力を日本のトップにすることを目標に臨床英語教育に注力することを決定しました。

2) 本学の将来像の策定

奈良県当局と毎月1回以上奈良医大の将来像策定のための話し合いを重ねています。奈良医大の教育とは何か、研究とは何か、臨床はどうあるべきかについて奈良県側から知事、副知事、医療政策部長が出席、奈良医大側から理事長、理事をはじめ主立ったメンバーが参加して真剣に討論して参りました。昨年の12月14日(日曜日)には6時間に及び集中討議を行いました。

このような中からキャンパス移転時に単に建物を新築するのではなく、新しい発想の新しい大学として飛躍する礎が築かれつつあるように思っております。

その中で、知事の英断により、奈良県から本学への支援増大が決定されました。従来は「新キャンパス分は県の全額負担、現キャンパス分は医大が75%負担」でありましたが、「新キャンパス分は県の全額負担はそのまま、現キャンパス分は医大が38.75%負担と大幅軽減」となりました。数百億の単位ですから、医大にとりまして、飛躍のための大きな恵みとなります。

3) 対外的活動～標原に軸足をおきながら、もう片方の足は全国に、世界に～

- ・日本最大の研究機関である産業技術総合研究所と連携協定を締結し、奈良医大の研究力を強化することにしました。
- ・国立循環器病研究センターとの連携協定締結合意により、特に教育・研究面での発展が期待されます。
- ・関西公立医科大学・医学部連合(KNOW: 京都府立医大(K)、奈良県立医大(N)、大阪市立大医学部(O)、和歌山県立医大(W))を結成し、関西の4公立医科大学が相乗的に発展できる協力体制を構築しました。
- ・私の提唱しているMBT(Medicine-Based Town、医学を基礎とするまちづくり)構想が内閣府の地域活性化モデルケースに採択されました。これは全国で10件採択された地方都市型の一つです。
- ・奈良医大MBT構想実現のために民間活力の導入を行います。そのために富士通、関電、凸版印刷を幹事会社とするコンソーシアムを立ち上げる準備を始めました。コンソーシアムの事務局は奈良医大に置きますが、事務局機能を富士通総研が分担することが決まりました。その他数社の参加も予定されています。

私は、20世紀の産業は工学が中心、21世紀の産業は医学が中心と書いて来ました。奈良医大が持つ高度の医学・看護学の知識を患者さんだけでなく、産業の創生に役立てたいと思っています。上記のような大企業だけでなく、地場産業も参加して奈良医大MBTを成功させたいと考えています。

今年も奈良医大の全教職員・学生・同窓会・関係者の方々に世の中の流れとそれにどのように奈良医大の執行部が対応していくのかを節目節目で報告して参りたいと思っております。

本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

(総務課)

叙勲受章者のお知らせ～心からお祝い申し上げます～

叙勲は、国家又は公共のために功労のあった方を対象に授与されています。

去る、11月3日に平成26年秋の受章者の発令があり前看護師長の中川 やよい氏が受章されました。

心からお祝い申し上げます。

■ 瑞宝単光章 中川 やよい 氏(前看護師長)

奈良医大軽音楽部The Hard Stream Orchestraが「Kimono Jazzgl」に出演しました

平成26年11月22日、今井町の順明寺で今井町じゃず実行委員会主催の「Kimono Jazzgl in 2014」に奈良医大軽音楽部 The Hard Stream Orchestra が出演しました。

「Kimono Jazzgl」とは今井町じゃず実行委員会が企画・運営するジャズイベントです。今井町はかつて「大和の金は今井に七分」といわれるほど繁栄した町です。現在も町の大半の町家が大切に保存され、近世以前の町並みがこれだけまとまって残っている場所は日本唯一と言われていています。その今井町で、地域と人、医療とが音楽の力で一つになり、誰もが楽しむことのできるイベントを創りたい!という想いから「ココロのバリアフリー」をテーマに Kimono Jazzgl in 2014 が開催されました。

The Hard Stream Orchestra は JAZZ と書道のコラボレーションということで、着物での演奏中に若林梅香さんによる書道のライブパフォーマンスが行われました。その他にも奈良医大の学生団体

「チーム PRE ドクターズ」による、ココロもカラダもほっこりできる「今井汁」が振る舞われました。当日会場は大変な賑わいを見せ、今井町にある「心のバリアフリー」を感じ取ることができました。

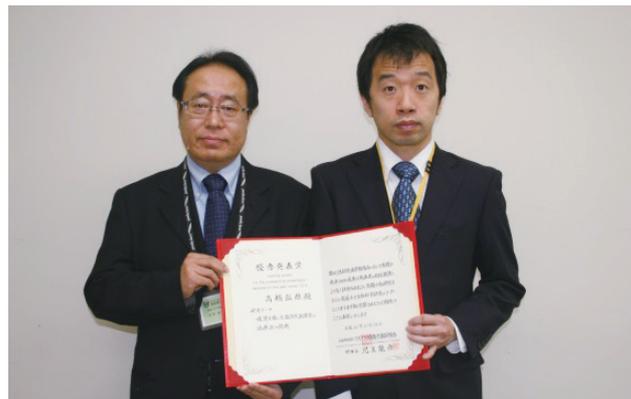


当日の様子

第 45 回アステラス病態代謝研究報告会で優秀発表賞を受賞しました

脳神経システム医科学 助教 高橋 弘雄

本学脳神経システム医科学講座(坪井昭夫教授)の高橋助教による研究「嗅覚を用いた脂質代謝異常の治療法の開発」が、公益財団法人アステラス病態代謝研究会の研究報告会で優秀発表賞を受賞。本報告会は10月18日に日本工業倶楽部(東京)で開催され、平成25年度に593名の申請者の中から採択された研究助成金交付者51名において、高橋助教の口頭発表が学術委員の公平な審査により、優秀発表賞に選ばれました。



受賞された高橋助教(右)と所属長の坪井教授

第 12 回日本時間生物学会で学術奨励賞を受賞しました

地域健康医学講座 助教 大林 賢史

本学地域健康医学講座の大林賢史助教が平成26年11月8日～9日に福岡県で開催された「第12回日本時間生物学会学術大会」で学術奨励賞(臨床・社会部門)を受賞しました。日本時間生物学会は、あらゆる生物(植物やバクテリアからヒトまで)のリズム現象を扱う学際的な学術団体であり、多くの世界的に著名な研究者が所属する学会です。日本時間生物学会学術奨励賞は、時間生物学領域で顕著な業績をあげ、今後の活躍が期待される若手研究者(臨床・社会部門は41歳以下)を表彰するものです。今回の受賞は同講座で平成22年から実施している前向きコホート研究の横断解析で、日常生活の光曝露が多種多様な健康指標

と関連していることを明らかにしたことが評価されたものです。



受賞された大林先生

(看護部)

平成26年度医学教育等関係業務功労者表彰

大学における医学についての教育、研究、患者診療等に関する業務について、特に顕著な功績があったとして、11月20日に文部科学大臣から表彰されました。

西尾 栄美 氏 (看護部)



平成 26 年度白樺生祭のご報告

白樺生祭実行委員長 井上 洋平 (医学科 5 年生)

今年も例年同様秋涼爽快の心地よく過ごしやすい 10 月末に、平成 26 年度奈良県立医科大学白樺生祭を開催させていただきました。今年の白樺生祭のテーマは「奈良医大ってどんなところ?」です。このテーマは、奈良県内の人や県外の人、老若男女問わず全員に奈良医大に興味を持っていただきたいという思いを込めつけさせていただきました。そのテーマにかけた願いが叶ったのか、台風の子供ということもあり、毎年ジジクスのように雨が降っていた奈良県立医科大学白樺生祭ですが、今年は綺麗に 3 日もとも雨も降らず美しい秋晴れとなりました。心地よい天気の影響もあり、とても多くの人に足を運んでいただき、白樺生祭も例年以上で非常に盛り上がった結果となりました。去年に引き続き、進学相談会や医療体験実習なども並行して行い、学生またその家族の方々にも気軽に訪れていただき、簡単に医療や奈良県立医科大学の雰囲気にもふれることができてかつ、学祭の雰囲気も味わっていただけ、実行委員としては非常に嬉しく思いました。

近年の白樺生祭は学生らしいステージ企画や模擬店はもちろんのこと、学術的な側面にも力を入れており、医科大学らしい大学祭を行おうと努めております。毎年「Skills-lab」と称して、機器を使った検査や外科的手技を一般の方にも体験していただいております。体験内容としては、縫合、結紮、ガウンテクニック、エコー、採血、気管挿管、聴診、点滴などを用意しております。毎年多くの方に好評いただいております。また今年のシンポジウムは、例年と変わり 2 部構成となりました。第一部は橿原市の森下市長をお招きし、橿原市シティブォーラムの一環として「学生と語る橿原市のまちづくり 橿原市について話し合いませんか?」という題目で森下市長、奈良県立医科大学細井学長、そして奈良県立医科大学の学生を交え、学生なりに見た橿原市の現状や今後の本学と橿原市のあるべき姿について対談が行われました。この試みは今年初でありましたが、森下市長を始め協力、参加してくださった皆様に深く御礼申し上げます。また第二部として「DMAT と災害～私たちにできること～」がテーマで国際緊急援助隊 (JDR) の隊員として活躍し、現在は JDR のアドバイザー、DMAT の統括兼インストラクターをされている米盛病院 救急科 畑倫明先生と JDR 医療チーム総合調整部会委員、また日

本 DMAT 検討委員会作業部会委員をされている神戸学院大学 現代社会学部社会防災学科教授 中田敬司先生をお招きし、災害時、医師だからできること・医師じゃないからできること、災害医療活動になくてはならないもう一つの活動についてご講演していただきました。地震や台風などの災害による被害が増えている今日の日本において非常にためになるお話をいただき、参加していただいた方にとっては大変有意義な時間になったと思います。

また「沢村一樹トークショー」は大盛況に終わり、メインステージでの企画も例年以上に大いに盛り上がりました。会場で各学生が奮って出店した模擬店も活気を帯びていました。

今年の白樺生祭も、例年同様大成功を収めることができました。半年以上の準備を要しましたが、その間、実行委員のみなさんもポリクリでなかなか集まらなかったなか、なんとか最後までやりきり、みんなで成功を噛みしめ合えたのは最高の思い出です。私自身、多くの方々に支えをいただきながら白樺生祭実行委員長を務めさせていただきましたが、多くの人が協力して一つの事を成す中で、仲間を想う協調性と役割ごとの連携の大切さを感じました。ここで得たチームワークとしての経験は実行委員のみんなの中でも糧となっていると思います。

最後になりましたが、今年度も奈良県立医科大学白樺生祭を開催するにあたりご協力くださった、同窓会、大学当局及び関係者各位、並びに多くのアドバイスをくださった諸先輩方にこの場をお借りして、実行委員一同より厚く御礼申し上げます。ご協力いただきまして本当にありがとうございます。これからも白樺生祭、白樺生祭実行委員をよろしくお願いします。



シンポジウム「学生と語る橿原市のまちづくり」



メインステージ

Student Doctor 認定証授与式

平成 26 年 12 月 2 日 (火)、これから臨床実習を開始する医学科 4 年生を対象に、Student Doctor 認定証授与式を挙行了しました。

本授与式は、共用試験 (CBT・OSCE) に合格し、臨床実習を開始するために必要な知識・技能・態度を有していると認められた学生に対し、実際の医療現場において、患者と直に接する立場に立つ責任感や、医療人としての自覚を促すことを目的としています。

医療人に求められる守秘義務や倫理観について講話が行われたあと、古家附属病院長から学生に激励の言葉が送られました。続いて、学生の代表が医療の現場に参加する者としての決意を宣誓しました。最後に、上野臨床教育部長から臨床実習における心構えとして、「実習に協力して下さる患者さんや関係者から信頼される態度を身に付けてほしい」と訓示があり、学生に

Student Doctor 認定証が授与されました。

授与式を終えた医学生たちは、翌週から Student Doctor としての自覚を持ち、附属病院での臨床実習に臨んでいます。



古家附属病院長



上野臨床教育部長

高大連携教育を推進しています

本学では、高校生の理科に対する興味を高めるため、高校生を対象とした本学での講義、実習の体験的学習を行っています。

今回は平成 26 年 10 月 27 日に「カメ」をテーマにして、本学の生物学実習室で開催し、畷傍高校の生徒 20 名が参加しました。当日は、神戸市立須磨海浜水族園でカメの研究をされている上野真太郎さんによる講義の後、須磨海浜水族園から提供いただいたカメの解剖を、生物学教室教員 3 名と外部講師 1 名の指導のもとで行いました。高校生は普段の授業では体験できない実習に熱心に取り組みました。

高大連携授業では、カメについての講義と解剖実習をさせていただきました。講義では、外来種が増え在来種が減ってきている問題が取り上げられていましたが、在来種の保護の問題については、自分たちもしっかり向き合っていかなければならないと思いました。

一方、カメの解剖は、普段の授業では絶対できない貴重な体験ができました。始めは慣れない器具の扱いや命を絶つことの罪悪感で、恐る恐るハサミやメスを動かしていましたが、解剖が進むにつれて、臓器のつながりや仕組みが理解でき、生命の不思議さと調べることの大切さを実感することができました。また、大学の先生方も優しく指導して下さったので楽しい実習になりました。(畷傍高校 O さん)

カメの解剖の説明プリントを見て一番驚いたことは、カメに麻酔を打って殺すということです。それを読むまでは、死んだカメを解剖するものかと思いついていたので、気持ち悪くなるのではないかととても心配でした。また、扱うカメが一匹だということにも驚きました。自分で殺すことに躊躇ってしまい、ハサミで思い切り切ることができませんでした。ただ、そこを過ぎてしまうとそんなに恐くもなくなりました。

お腹を開けると内蔵が見えました。乱暴に扱うと大事なところを傷付けてしまいそうで、とても慎重になってしまいました。来年こそはもっと大胆にしたいと思います。とても緊張して手が震えてしまったり、力が入らなかったりして大変でしたが、最後はやって良かったなと思いました。

(畷傍高校 T さん)



実習の様子



実習終了後の集合写真

独立行政法人産業技術総合研究所と連携・協力に関する包括協定を締結しました

本学と独立行政法人産業技術総合研究所は、平成26年10月14日、大阪科学技術センターにおいて細井裕司理事長と産業技術総合研究所の中鉢良治理事長が出席して、『公立大学法人奈良県立医科大学と独立行政法人産業技術総合研究所との連携・協力に係る協定』を締結しました。

本協定は、共同研究などの研究協力や人材協力・人材育成を推進することにより、医療や看護の現場、日常生活場面における課題解決に向けて、相互の知見・技術を活用し、個別に進めてきた研究開発を融合して、健康に関わる研究開発の更なる促進と成果の創出を目指すものです。

連携する事項は、(1) 共同研究等の研究協力、(2) 研究交流及び人材交流、(3) 教育・人材育成の相互支援、(4) 研究施設・設備の相互利用、(5) その他、双方が必要と認める事項としています。

会見の中で細井理事長は、「お互いの医学的知識、工学的知識を生かした基礎研究、奈良医大での臨床研究をマッチングさせ、大きな成果を出せると期待している。」と話され、中鉢理事長からは、「奈良医大・産総研の間で、研究開発の融合が進み、医療や介護の現場、日常生活において実用性の高い医療・健康技術の開発が早期に実現されるものと期待している。」とのコメントをいただきました。



調印後、協定書を披露する本学細井理事長（左）と産総研中鉢理事長（右）



本学細井理事長、産総研中鉢理事長と双方の関係者

ベトナムのトゥアティエン・フエ省の人民委員会副委員長が来学されました

奈良県が開催した第5回東アジア地方政府会合で来県されたベトナムのトゥアティエン・フエ省のグエン・ズン人民委員会副委員長が10月28日(火)に本学を表敬訪問され、細井理事長、山下総務・経営担当理事、車谷教育・研究担当理事と懇談されました。

トゥアティエン・フエ省はベトナムの中部にある人口約110万人の省で、ベトナムの古都であるフエ市が省都であり、今回来学された人民委員会副委員長は我が国では県副

知事に相当するフエ省の幹部です。

懇談の中で、グエン・ズン副委員長からは奈良県とフエ省は共に古都で似た環境であり、フエ市にはフエ医科大学があるので、今後、本学と協力関係を結んでいきたいとの申し出があり、本学としても前向きに取り組んでいくことで合意しました。



記念品の交換をする細井理事長とグエン・ズン副委員長



懇談された関係者

総合防災訓練を実施しました

平成 26 年 11 月 5 日に実施した今年度の総合防災訓練は、学内全域を対象とし防災力の向上を図るため、大規模地震が発生したとの想定の下、3 部構成で実施しました。奈良県広域消防組合橿原消防署にも参加いただいた訓練は、昨年度の約 2 倍の総勢 276 名という大規模なものとなりました。

第 1 部訓練では大規模地震発生直後の人命を守る救出、救護、避難誘導の活動をはじめ、多発する火災に対する消火活動などを「災害対策本部」「自衛消防・防災隊」「防災センター」「エネルギーセンター」「各病棟」の各組織が連携して総合的に行いました。

また、第 2 部訓練では本学初となるトリアージおよび救護所活動訓練を実施しました。本学附属病院は、奈良県唯一の基幹災害拠点病院であり、地震災害等発生時には短時間の間に多数の傷病者が搬送されてきたり、直接来院したりすることが予想されます。しかしながら、災害時の医療資源（医療スタッフや器材、医薬品など）には限りがあり、制約された条件下で 1 人でも多くの傷病者を救うためには、病気や怪我の緊急度や重症度によって初期治療や後方搬送の優先順位を決めることが必要となります。この優先順位を決めることこそが、「トリアージ」であり、初期治療を行うのが救護所活動となります。訓練当日は、看護師にトリアージを行ってもらい、総合診療科の西尾教授を中心として、救急科と総合診療科の医師、看護師を主体としたコメディカル部門や事務部門などが参加し、約 50 名の模擬患者に対してトリアージと初期治療を行いました。

大学全体をあげての本格的な訓練を今回初めて行い、災害時にすべきことを具体的なイメージとして多くの職員が共有できました。また、その中で出てきた課題を認識できたことも大きな成果であると考えております。このような訓練を繰り返すことで、実際に災害が起こった時にも、全職員が慌てず、すべきことを理解してスムーズな行動をして、より多くの人を救命することにつながります。

▶自衛防災訓練（第 1 部訓練）

震度 6 弱の強い揺れが観測され、大講堂、C 病棟 5・6 階では火災発生及び要救助者が生じたとの想定の下、自衛消防・防災隊の各地区隊が消火、救出、救護、避難誘導活動を行いました。

さらに C 病棟 5・6 階では、アクションカードを活用した実践的な活動を実施。

また、模擬患者 12 名の担架搬送・介添え誘導訓練に取り組みました。

▶トリアージ訓練（第 2 部訓練）、訓練講評

本学初めてのトリアージ訓練に取り組みました。訓練途中に小雨が降りましたが、消防隊の方にも参加いただき、約 50 名の模擬患者のトリアージを行いました。

その後、細井理事長、北予防課長（消防署）より講評頂きました。

▶訓練検証会、消火器取扱い訓練（第 3 部訓練）

訓練検証会を開催。北予防課長（消防署）から、「強い問題意識を持ち、着実に訓練を重ねて頂いていることが見受けられる」と評価して頂きました。

また、参加者からは「災害時の連携のあり方や自分が一体何をしなければならないかが認識できた」との声を多く頂きました。

今後は、これまでの訓練で明らかとなった防災上の課題を改善していくとともに、災害対策本部の施設整備、資機材・備蓄品の充実等にも取り組んでいく予定です。



本部隊による指揮命令訓練（エネセン 2 階）



大学地区隊による消火訓練（大講堂）



病棟隊アクションカードによる活動（C 病棟 6 階）



地区隊、病棟隊による担架搬送（C 病棟非常階段）



災害医療統括部トリアージ訓練



トリアージ訓練後の理事長による訓練講評



消防署指導による消火器取扱い訓練



訓練検証会の様子（厳樫会館 3 階）

▶今年度実施した防災訓練一覧

7月	自衛消防・防災隊本部隊訓練、地区隊訓練
11月	災害対策本部訓練、自衛消防・防災隊本部隊訓練、地区隊訓練、防災センター訓練、エネセン訓練、C 5・6 病棟訓練、総合防災訓練

※なお、この他にも病棟ごとで独自に防災訓練が行われています。

市民公開講座「子どものころを育てる大人の関わり方 ～自己肯定感と共感力を考える～」を開催しました

精神医学講座 助教 上田 昇太郎

平成 26 年 11 月 16 日 (日)、早稲田大学大隈記念講堂において、奈良県立医科大学および日本精神保健・予防学会が主催となり市民公開講座「子どものころを育てる大人の関わり方～自己肯定感と共感力を考える～」を開催しました。これは、平成 26 年 11 月 15 日・16 日に催された第 18 回日本精神保健・予防学会学術集会の併催イベントになります。

第 1 部で、法政大学教職課程センター長・教授および臨床教育研究所「虹」所長の“尾木ママ”こと尾木直樹先生に、大切にしたい幼少期の関わり方や育て方について

講演していただきました。「尾木先生に訊く」と題された第 2 部では、本学の岸本 年史が聞き手となって尾木先生との対談と質疑応答がおこなわれました。尾木先生のネームバリューも手伝ってか、当日は約 800 名の市民が参加され、盛況のうち幕を閉じることができました。



ご講演された尾木先生

(総務課)

なかよし保育園で園児向け防犯教室を開催しました

平成 26 年 11 月 1 日なかよし保育園で「遊びと学びの秋」のテーマのもと文化祭を行いました。園児たちの作品展示や遊びの広場ではゲームを保護者とともに楽しみました。文化祭ではゲストとして奈良県橿原警察署生活安全課の方をお招きし、「防犯教室」が行われました。防犯教室をしていただいた目的として、平成 24 年 4 月より就学前までの園児を受け入れたことで、日常の行動範囲も広くなる園児たちの防犯意識を高めるためにこのような機会を計画しました。

生活安全課から 2 名の方が子どもたちに防犯の約束事をカードを使ってわかりやすく教えてくださいました。「いかのおすし一人前」の標語に合わせ「㊀㊁ない、㊂らない、㊃おごえをだす、㊄ぐにげる、㊅らせる、㊆㊇では絶対にあそばない、あそぶ㊈にだれとどこであそぶのかを言う」と声に出して言いました。

はじめは「いかのおすし?」とその言葉に興味を持っていた様子でしたが、カードや言葉で一つ一つの言葉の意味を知ると「おごえをだすってどう言うのかな?」と聞かれると「たすけてーって言う!」と答えた園児がいました。いざとなるとなかなか声が出せないものですが、このように教室で教えていただくことで子

どもたち自身が意識を持って日々過ごせると思いました。カードや言葉での学習のあとは、音楽に合わせてみんなで歌って踊りました。子どもたちは体を動かすことが大好きなのですぐに踊りを覚えることができたようです。

職員も子どもたちも「いかのおすし一人前」の歌が今でもずっと耳に残っており、特に年中年長児は時々みんなで口ずさみ、覚えた踊りも交えながら楽しんでます。これから小学校へ行ってもずっと守ってきたい標語なので、文化祭を通して橿原警察署生活安全課の皆さんに来ていただけたこと、またこのような機会を持てたことは貴重な体験となりました。今後も忘れないように言葉がけていきたいと思えます。



当日の様子

(病院管理課)

絵画を寄贈いただきました

このたび、伏見智恵美様のご厚意で本学に第 36～40 回日本美術展覧会第 1 科入選作品の日本画 5 点を寄贈いただきました。寄贈された絵画は 120～150 号の大作で、草木や鳥などのモチーフを天然の岩絵具を用い色鮮やかに描かれた作品です。

9 月 29 日に行われた感謝状贈呈式では、細井裕司学長から伏見さんへ「大変素晴らしい作品を寄贈いただきありがとうございます。患者さんをはじめ多くの方に鑑賞していただけるよう大切にさせていただきます。」とお礼の言葉があり感謝状を手渡されました。

今回はいただいた絵画のうち 2 点を正面入口(作品名: 蒼韻)と BC 棟 2 階の食堂前(作品名: 煌)にそれぞれ設置しました。展示後、通りかかった患者

さんや病院職員がじっくり見入るように眺める様子が見られました。これらの絵画は来訪される多くの方に安らぎを与えてくれることでしょう。ぜひ、皆さまもご鑑賞ください。



感謝状贈呈式の様子



食堂前に展示している作品「煌」

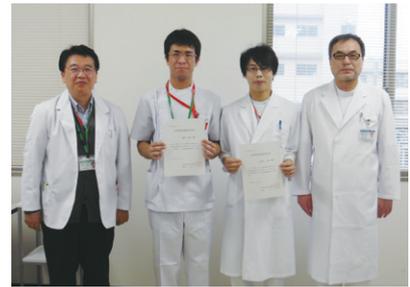
高度医療技術修得者を養成しています

本院では、医療技術の進歩による医療機器の多様化・高度化に対応ができる、より専門性の高い臨床工学技士を周術期のチーム医療に活かすため、臨床工学技士の麻酔アシスタント業務に関する高度医療技術修得者の養成を全国に先駆け奈良医大が独自に行っています。

平成22年6月からスタートした「麻酔アシスタント業務に関する臨床工学技士の高度医療技術修得のための研修プログラム」は、日本麻酔科学会編「周術期チームテキスト」を基準とし、麻酔指導医の指導による500例以上の実習(OJT)を中心とした1年を通じた研修です。

今回、第4期生として、医療技術センターの臨床工学技士2名(森田庸介技師、小野寺広希技師)が、この研修プログラムを修了し、高度医療技術修得者養成認定審査委員会の認定審査を経て、11月25日委員長である中島副院長から両名に認定証が交付されました。

これにより総勢8名の臨床工学技士が高度医療技術修得者として、麻酔科医と共に周術期領域で活躍します。



第4期生の森田さん・小野寺さん(中央2人)

高度医療技術取得者

平成22年度(第1期生)	杉本 浩士	川西 秀明
平成23年度(第2期生)	塩田 隆	杉田 匠
平成24年度(第3期生)	藤田 剛史	山中浩太郎
平成25年度(第4期生)	森田 庸介	小野寺広希

がん化学療法医療チーム研修会を開催しました

腫瘍センター長 神野 正敏

平成26年2月、がん化学療法のレベルアップに寄与するために、本学附属病院より腫瘍センターで勤務する医師、薬剤師、看護師、さらに医療相談室に所属する相談員(MSW)の4名がチームを結成し、国立がん研究センターで開催された「がん化学療法医療チーム養成にかかる指導者研修」を受講致しました。この研修受講成果を県内多施設にフィードバックして、がん医療均てん化の一助とすべく、さる11月30日(日) 厳橿会館に於いて奈良県内でがん診療に携わっている病院の医療従事者を対象に、チーム医療研修会を開催しました。今回は、患者さんの背景を踏まえて新薬剤を安全かつスムーズに導入できること、を目標とし医師・薬剤師・看護師・MSWの4職種で構成されるチーム単位で県内各病院から参加を募りました。5施設から5チーム20名の参加応募があり、2名の外部招聘者を含む16名のファシリテーターとともに講義やグループワークを行いました。今回のチーム研修形式は、全国の先駆けとなった試みであ

り、国立がん研究センターからがん対策情報センターがん医療支援研究部教育研修室の担当者が視察に来られ、アンケート実施と数多くの貴重なご意見をいただきました。本学附属病院は都道府県がん診療連携拠点病院として県内がん診療の中心的な役割を担っており、がん治療に関する情報共有や診療技術向上の研修会開催などに努めることも重要な使命となっています。今回の研修会が、がん化学療法の領域でチーム医療を円滑に行なうことができるための一助となり、今後も継続発展していくことを期待しています。



研修会の様子

病院玄関口に新たに路線バスが乗入れました

病院玄関口へのバスの乗入れは、これまで橿原市昆虫館行(橿原市コミュニティバス)が1日7便のみと非常に少ない便数でしたが、平成26年10月1日より乗入便数が1日41便になりました。八木駅~医大間の往復バスが新設され、近鉄御所駅・下市口駅行のバスも病院玄関口まで乗入れるようになり、非常に便利になりました。

附属病院においては、駅からのアクセスが悪いこともあり通院患者の多くが車を利用し、駐車場の混雑が問題となっています。今回の路線バスの新規乗入れにより、公共交通機関の利用を促進し、駐車場の混雑解消にも繋がるのが期待されます。平成26年10月の乗降実態調査では、病院玄関のバス合計利用者数は平成26年9月比で1割増加という結果もできています。

学生・教職員の皆様も傘いらずで通勤・通学できますので、ぜひご利用下さい。



八木駅(南口)のりば案内図



八木駅(南口)1番のりば

クラブ紹介

いま、錦織圭選手が日本人初となるグランドスラム決勝に進出し、それに続きツアーファイナル初出場ながら準決勝進出となる大躍進を遂げました。日本でも生中継されるなど注目度が高く、テニスブーム再来の兆しがみえます。

ここ最近、奈良県立医科大学硬式庭球部でも、その活躍に影響され日々練習している限りです。硬式庭球部は、オムニコート2面を軟式テニス部と共同で使用し、練習は週3回、週末には対外試合を行う時もあります。それ以外は、授業の空き時間や、放課後などを自由に練習をすることができます。

練習したいときには、練習を。勉強やアルバイトなど他のことと両立して、上手な時間の使い方を覚えられます。そして、何よりもテニスに打ち込める、上達に必要な環境が整っています。

大学からテニスを始めた初心者から経験者まで男女ともに幅広いレベルの層の部員が在籍しており、大会での上位進出を目標に、互いに切磋琢磨しながら活動しています。



硬式テニス部

「文武両道」

部員 ▶ 47名

顧問 ▶ 金廣 裕道 (小児センター小児外科病院教授)

主将 ▶ 井川 勇人 (医学科3年)

練習日 ▶ 火、木、金か土

私たちギター部は、年に一度の定期演奏会に向けて練習をしています。部員のほとんどは大学でギターを始めた初心者で、始めのうちは楽譜を読むこともままならないですが、週2日の練習をこつこつと重ねることによっていつの間にか曲を弾くことができるようになっていきます。定期演奏会では部員全員で弾く合奏に加え、3、4人での重奏もしていて、様々なジャンルの曲を楽しむことができます。

また、普段の練習だけでなく、夏の合宿をはじめ、BBQをしたり旅行に行ったりと色々なイベントも行っています。学年、学科関係なく部員の仲がとても良いのもギター部の魅力の一つです。

ギターを弾くこと自体は一人でもできることですが、合奏となると全員の気持ちが一つにならなければ上手な演奏はできません。ギターを通して、それまで共通点もなくバラバラだった人間が一つの目標に向かって一緒に頑張っていくということはとても素晴らしいことだと思います。今後も良い演奏ができるように皆で練習していきたいと思えます。



ギター部

「一緒に演奏するという楽しみ」

部員 ▶ 26名

顧問 ▶ 高橋 幸博 (新生児集中治療部教授)

部長 ▶ 細田 佳奈子 (医学科3年)

活動日 ▶ 火・木の17時～19時

短時間勤務職員制度を拡充しました

概要

- ① 短時間勤務職員の取得要件について、現行の「育児」に、「介護」「負傷又は疾病」「修学・自己啓発」「その他理事長が必要と認める者」を追加
 - ② 部分休業の取得要件について、現行の「育児」に、「介護」を追加
 - ③ 正規職員について、介護休職制度の新設
 - ④ 非正規職員のうち、一定の要件を満たす者について、「育児」「介護」の短時間勤務、部分休業制度の新設
- *詳細は、総務課人事係(内線:2394)までお問い合わせください。

主な短時間勤務制度、部分休業制度の概要図

1 育児

期間	医大非正規職員		(参考)正規職員 (今回改正無)
	改正案	現行	
出生	育児休業	育児休業	育児休業
1年経過	育児休業	育児休業	育児休業
3年経過	育児部分休業(新設)	育児短時間勤務	育児短時間勤務
小学校就学前	育児部分休業(新設)	育児短時間勤務	育児部分休業
満9歳まで	*部分休業と短時間勤務は、選択制		*部分休業と短時間勤務は、選択制

2 介護 ①正規職員

期間	改正後			現行
	①勤務時間の短縮	②連続する期間での取得		
取得開始		ア 1年単位での取得 介護休職制度の新設	イ 1日単位での取得 介護休業制度の改正	介護休業制度 (1日又は15分単位で取得可)
183日経過	介護部分休業(新設)	介護休職(新設) ○1年単位 ○通年3年まで ○連続取得可能 ○正規職員のみ	介護休業 ○1日単位 ○通算183日まで ○連続取得可能 ○5年以内での利用	
3年経過				
5年経過	介護短時間勤務(新設)			
	理事長が必要と認める期間、短時間勤務職員延長可(新設)			

2 介護 ②非正規職員

○対象者：契約専門職員、嘱託職員、医員のうち、雇用後1年以上経過している者

期間	改正後		現行
	①勤務時間の短縮	②連続する期間での取得	
取得開始			介護休業制度 (1日又は15分単位で取得可)
183日経過	介護部分休業(新設)	介護休業 ○1日単位 ○通算183日まで ○連続取得可能 ○5年以内での利用	
3年経過			
5年経過	介護短時間勤務(新設)		
	理事長が必要と認める期間、短時間勤務職員延長可(新設)		

平成26年度(下半期)若手研究者国際学会発表助成事業 助成者決定

平成26年度(下半期)若手研究者国際学会発表助成事業助成者が、右記の3名の方々に決定しました。

この事業は、若手研究者の国際学会等での発表の機会を増大させ、国際的に活躍できる人材の育成を推進することにより本学における研究活動の一層の活性化を図るため、10万円を上限とし往復運賃相当額及び宿泊費相当額を助成しているものです。

毎年、上半期と下半期に各所属に応募要項を案内していますので、積極的なご応募をお待ちしています。

所属	職名	氏名
放射線医学	講師	田中 利洋
泌尿器科学	助教	鳥本 一匡
麻酔科学	医員	赤崎 由佳

平成26年度 中島佐一学術研究奨励賞の募集

この賞は、故中島佐一名誉教授のご遺族からの寄付金を財源として、医学の学術研究に優れた業績をあげた本学の若手教員に対して授与し、さらなる研究の発展を奨励することを目的としています。

つきましては、下記の募集要項により募集しますので、積極的なご応募をお待ちしています。

募集期間	平成27年1月30日(金)まで	
募集要項	学内ホームページに応募要項及び申請書を掲載しています。	応募資格
	学内専用→研究推進課→各種団体からの研究助成金について→中島佐一学術研究奨励賞	
	http://top.naramed-u.ac.jp/jimu/kenkyu/nakajimasho.htm	受賞者数
		副賞
		・奈良県立医科大学医学部医学科の若手教員(原則として申請時に45歳未満の者とする。)
		・1教室につき1名(附属病院中央部門に勤務する教員については、その出身する教室に所属するものとみなす。)
		原則2名
		研究奨励金を授与(平成25年度は、1人につき30万円)

図書館だより

検索マスターへの道 (第3回)

検索テーマ	アルコール飲料の摂取は乳癌発症リスクを増加させるか
出典	科学的根拠に基づく乳癌診療ガイドライン② 疫学・診断編 2013年版
検索日	2014年12月5日

ある疑問に対し、医学情報データベースでどのように検索するかを解説するシリーズ、第3回は診療ガイドラインからテーマを選びました。診療ガイドラインは「疫学」、「診断」、「治療」、「予防」などのカテゴリごとにCQ(クリニカルクエスション；臨床上の疑問)が立てられており、今回は「疫学」の中のCQをピックアップしました。

PubMedで検索します。まず、検索テーマから思い当たる「Breast Cancer」、「Alcohol Drinking」、「Risk」をキーワードとして使ってみます。(図1)

Search	Add to builder	Query	Items found
#4	Add	Search #1 AND #2 AND #3	825
#3	Add	Search risk	1691846
#2	Add	Search alcohol drinking	63040
#1	Add	Search breast cancer	290658

(図1)

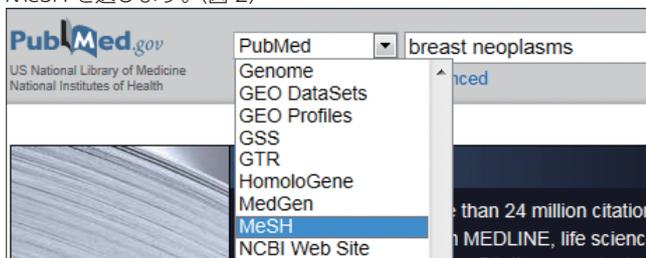
3つを掛け合わせると825件と件数がかかなり多くなりました。まずは検索語から自動生成された検索式を確認します。(表1)

	検索語	自動生成された検索式
#1	breast cancer	"breast neoplasms"[MH] OR ("breast"[AL] AND "neoplasms"[AL]) OR "breast neoplasms"[AL] OR ("breast"[AL] AND "cancer"[AL]) OR "breast cancer"[AL]
#2	alcohol drinking	"alcohol drinking"[MH] OR ("alcohol"[AL] AND "drinking"[AL]) OR "alcohol drinking"[AL]
#3	Risk	"risk"[MeSH Terms] OR "risk"[All Fields]

(表1)

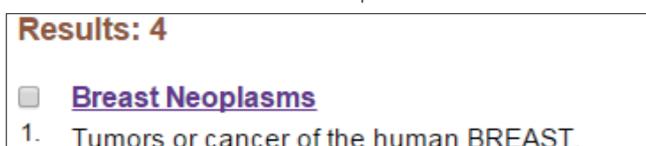
まず、#1、#2は入力した自然語やMeSHのほかに単語をANDでかけたものが検索されています。これではむやみに広く検索してしまうので、フレーズ検索しているもの以外は削除してすっきりした検索式にします(「検索マスターへの道」第1回を参照)。

また、件数が多いときはMeSHを使って限定的に検索するという方法があります。#1「breast cancer」には「breast neoplasms」[MH]が付与されているので「breast neoplasms」をMeSHデータベースで確認します。PubMed検索ボックスに「breast neoplasms」と入力し、横のプルダウンメニューからMeSHを選びます。(図2)



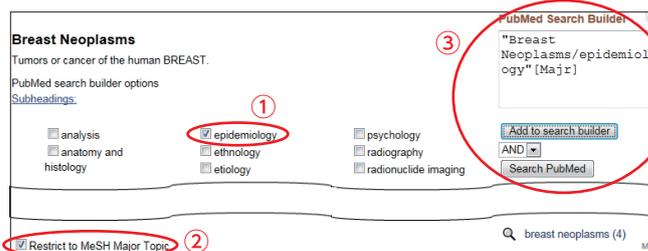
(図2)

候補が出てくるので、「breast neoplasms」を選択します。(図3)



(図3)

Breast Neoplasmsのページが開きます。(図4)



(図4)

このMeSHの下にずらっと並んでいるのがサブヘディングです。MeSH(主標目)の概念を限定するものをサブヘディング(Subheading、副標目)と言います。サブヘディングはキーワードの概念を限定するときに使います。例えば今回の場合、お題のカテゴリは疫学なので、「epidemiology」というサブヘディングをつけて「breast neoplasms/epidemiology[MeSH]」とします(図4-①)。主標目「Breast neoplasms」の中でも、特に疫学に限定したMeSHで検索できます。

また、MeSHのもう一つの絞り込み方として、Major Topicに絞る方法があります。文献の中心的なMeSHをMajor Topicと言います。「検索マスターへの道：第2回」で医中誌のメジャー統制語について書きましたが、それと同様の意味です。MeSHをMajor Topicに絞り込むときは、MeSHデータベースのサブヘディング一覧の下に、「Restrict to MeSH Major Topic (MeSHをMajor Topicに限定)」という項目があるので、チェックを入れます。(図4-②)

サブヘディングやMajor Topicに絞り込んで検索するときは、チェックを入れ、MeSHデータベース右上部の「Add to search builder」で検索式を作成し、「Search PubMed」をクリックします。(図4-③)

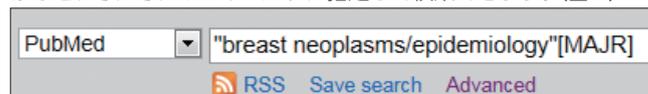
では、これらの機能を使ってみましょう。「乳癌」に「疫学」のサブヘディングを、「飲酒」に「副作用」のサブヘディングをつけ、Major Topicに限定して検索します。(図5)

Search	Add to builder	Query	Items found
#4	Add	Search #1 AND #2 AND #3	53
#3	Add	Search risk	1691846
#2	Add	Search "Alcohol Drinking/adverse effects"[Majr]	4699
#1	Add	Search "Breast Neoplasms/epidemiology"[Majr]	12898

(図5)

53件と最初の検索件数よりかなり数を減らすことができました。ただし、あまり限定してしまうと重要な文献が漏れていることがありますので、限定して検索するときは限定していないときと結果を比べてみることも大切です。MeSHは便利ですが、MeSHで検索する時点ですでにMeSHの付与されていない最新の文献は含まれていないことになり、網羅的に検索したいときは、自然語もORで掛け合わせることをお忘れなく。

MeSHデータベースからサブヘディングやメジャーを限定する方法のほかに、キーワードに直接タグやサブヘディングをつけて検索することもできます。MeSHは[MH]、サブヘディングは「MeSH/副標目」、メジャートピックは「MAJR」をキーワードの後ろにつけると、それぞれのフィールドに指定して検索できます。(図6)



(図6)

今回は疫学のCQを使って検索しました。疫学、診断、治療、予防のカテゴリではどのようなサブヘディングが有効なのか、こういった検索方法があるのかをこれから解説していきますので、次号以降もお楽しみに！また、こんな検索はどうやるの？といったお問い合わせも受け付けていますので、検索でお悩みの方は図書館スタッフまでお気軽にお尋ねください。

母子関係の研究に魅せられて

看護学研究科女性健康・助産学

教授 脇田 満里子



私は、助産師としての臨床経験7年後に助産師学校の恩師(故早川かつ先生、大阪赤十字助産婦学校)の勧めで藍野学院短期大学(現藍野大学)に母性看護学の教員として勤務することとなりました。

その後、厚生省認定看護教員養成講習会を受講し、修了後も母性看護学教員5人と月1回研修会を開いて抄読会や各校の情報交換をしていました。

当時日本に翻訳紹介された【母と子のきずな】klaus&kennel, 1979.の抄読会を進めていました。私たちの抄読会の存在を知った翻訳者の竹内徹先生から【母と子のきずな】を作成するにあたっての資料を紹介する機会があるとお誘いいただきました。

私たちは大喜びで、途中だった抄読会を全文読み終え、淀川キリスト教病院の会議室に集まりました。その時提示された実験データや原画の数々は、今も鮮明に私の脳裏に焼き付いています。

中でも当時までは新生児、特に誕生まもない児の能力(視覚、聴覚、触覚、嗅覚、味覚)は未発達で不完全なものと捉えられ、そのように教育されていたのですが、私の今までの築きあげてきた新生児のイメージ(能力)が音を立てて崩れていく感覚に襲われました。

また、それらを充分認識した上で母子関係を築いていく必要性と従来の認識による関わりでは母子相互作用が十分機能しないことに気付かされました。

このことから母子相互作用を深めることの意義についてそれまでの抄読会では理解しえなかったものが一挙に私の中で解決したのを感じています。

その5年後、klausとkennelによる【親と子のきずな】、1985がさらにデータを増やし、父親の視点も取り入れて出版され、翻訳紹介されました。

おりしも産科領域において陣痛室、分娩室でのモニター装着、誘発分娩、分娩台に固定された仰臥位分娩、会陰切開、計画分娩、母児異室制、時間授乳など自然出産とはかけ離れ、さらに医療介入が当然のごとくなされた分娩があちこちの施設で見られるようになりました。

これらに対する疑問が私の研究のスタートとなり、当時それまで女性は母となることで当然備わるとされていた母性は、本能の部分だけでなく学習することによって、あるいは他から影響を受けて母性意識が形成されるという

つまり Deutsch,H. の提唱した3次元(生理的・生物学的、社会・文化的、感情的統一体としての個)で母性を定義していることに強い影響を受けました。そのため、母子相互作用の助長への支援に研究テーマがシフトしていきました。

また、母子関係を深める援助を追求するために、人間やサルと比較行動の研究をしている大阪大学人間科学部比較行動論の研究生として2年間学ばせて頂きました。そこで、行動分析の手法を用いて、母と子の触れ合う場面(沐浴、授乳、食事)を通して母子相互作用を深める支援に焦点を絞って研究を進めてきました。さらに、「初期乳児期の母子相互作用と母性意識の形成」をテーマに修士論文を作成しました。

それと並行して妊娠・分娩・産褥の一連の過程におけるネガティブな面に焦点を当てて、出産体験の評価に影響する因子の縦断的研究を実施しました。その中から助産学ケアの方向性を探っていき、さらに母親となる過程において、上の子との関わりや夫との関係性に着目して研究を進めてきました。

上記の研究は日本助産学会、日本発達心理学会、日本母性衛生学会の専門学会に発表し、学会誌に原著論文として投稿してきました。

また、平成10年、本学短期大学部助産学専攻の準備室に着任し、平成11年4月～19年3月迄専攻科で、平成16年4月～23年3月迄は4年制の中で、そして平成24年4月～大学院の中での助産師教育を実施しています。

その間、助産学生に対し、助産学研究を指導し、その成果を専門学会へ発表することを義務付けています。

昨春大学院生1期生4名、そして今春2期生5名が女性健康・助産学領域から巣立とうとしています。これからも皆様のお力添えを頂きながらますます発展することを願っています。今後共よろしくご指導の程をお願いします。

奈良医大教養文庫を設置しました

教育開発センター 藤本 眞一

最近の大学生の読書離れは、きわめて深刻とされています。読書時間ゼロの大学生が4割を超える状況とする報告もあるようです。大変嘆かわしいことと思いますが、本学も決して例外とは言えないかもしれません。古来、知識の豊富な人、学者のことを「読書人」といいます。本学の学生諸君も、一流の読書人になってほしいと考えています。

第二期中期計画では、リベラルアーツの重点化を課題として取り上げています。このため、教育開発センターでは、教養教育の授業も大事ですが、学生諸君に読書を推奨することにしました。また、単に、読書を推奨するという掛け声だけでなく、真の意味での教養と言える良書を手に取って読む機会を提供することが必要であると考えました。

そこで、今回、図書館に「奈良医大教養文庫」として約400冊の本を用意しました。いずれも、良書と言えるもの

と思います。学生諸君には、是非、この機会を積極的に利用していただくように希望しています。

なお、平成27年1月から図書館のホームページでUSMLE(米国医師国家試験)受験対策のWEB問題集の利用を可能にしました。これについても、多数の学生が利用されることを期待しています。



教養文庫の前にて

(研究推進課)

新技術説明会にシーズを発表しました

9月30日(火)にJST東京別館ホールにおいて、本学内科学第一講座 斎藤能彦教授が(独)科学技術振興機構主催の新技術説明会で「心腎連関における可溶性Flt-1の産生低下とその治療戦略への応用」と題して、発表を行いました。

この新技術説明会は、大学等の研究機関の研究者がシーズ発表を行い、産業界とのマッチングを図るものです。(独)科学技術振興機構は産業界に広報活動を行い、シーズに興味を持つ企業が聴講し、発表後に企業との個別面談により連携に向けた協議が行われます。大学の新しい研究成果を産業界に紹介するのですが、単に発表するだけでな

く、発表テーマは大学による特許出願が必要です。

斎藤教授の研究成果は、本学の発明等専門部会で審議の上、本学が単独で特許出願したもので、今回の発表により、実用化に向けた企業とのマッチングが期待されます。



発表を行う内科学第一講座斎藤教授

産学官連携だより

■その発表、その前に

『A大学の研究者αが学会発表をした。その発表したものを基にB企業は改良発明の出願をした…』

本学でも起こりそうな事例ではないでしょうか？もしかすると実際に経験済みの研究者の方もいらっしゃるかも知れませんね。

大学教員が学会でご自身の研究成果を発表し、広く社会に還元することは、重要な使命と考えられます。しかし、発表により公知技術となると、それを利用して改良発明をした他人は特許出願をすることができます。発表技術に特許がないと、研究成果が使われたからとしても何も言うことができません。また、研究成果の社会還元という意味だけではそれで十分かもしれませんが、大学の研究者が特許出願することは、産学官連携を進展させていく上でも重要です。なお、事前に研究者αが特許を取得していた場合、B企業の改良発明は利用発明となり研究者αがした特許発明の権利者(大学等)の許諾を得ないと実施できないため、

大学(研究者α)はB企業に対して、様々な交渉を有利に進めることができます。

ご自身の研究成果を発表される前には、ぜひ一度特許についてお考えください。

さて、今年度のノーベル物理学賞を青色発光ダイオードを発明した日本人3人が受賞することが発表されました。受賞者のお一人である赤崎勇博士は、基礎研究を実用化につなげるため、1986年から5年間、現在の科学技術振興機構の前身である科学技術事業団の委託開発制度を利用し、豊田合成株式会社と共同で青色発光ダイオードの実用化に成功しました。3原色がそろったことにより、応用分野が広がり、多くの新産業を生み、新たな雇用も創出しました。産学連携による実用化は、アカデミックの世界だけではなく、産業界にも貢献することができます。産学連携にご興味のある方は、ぜひ産学連携推進センターにお問い合わせください。

※参考文献：文部科学省HP 大学等における産学官連携

奈良県立医科大学・同志社女子大学術交流に関する包括協定に基づく第8回公開シンポジウム「認知症の治療と予防の最前線」を開催しました

12月6日(土)に本学と同志社女子大学の共催によるシンポジウムを本学大講堂において開催しました。

当シンポジウムは同志社女子大と本学が毎年交互に開催しているもので、今回は「認知症の治療と予防の最前線」をテーマに、座長である本学教育開発センター藤本眞一教授と同志社女子大学生活科学部西村公雄教授のお二人による進行で、本学の博士研究員でもある三重県立こころの医療センター森川将行院長の基調講演「認知症を知ろう」に続いて、薬剤師の立場から同志社女子大学薬学部高島悠記特別任用助教(薬理学)の「認知症治療薬の進歩」、看護の立場で本学附属病院の池内勝継看護部主任から「看護が取り組む認知症治療」、食の立場から京都南病院介護老人保健施設ぬくもりの里 前野雅美管理栄養士の「認知症の方の【食】を守るために」、医師の立場から本学精神医学講座小坂淳講師の「医者がお手伝いできること」と題して、それぞれ講演いただきました。

講演では、認知症の基本知識や心構え、治療薬の進歩などまさしく現場での最前線の取り組みなどについて、それぞれの立場から分かりやすく説明をいただきました。

県内外から約450人も多数の参加があり、総合討論の際には会場から病状や治療薬についての多くの質問がでて、壇上のパネラーとの活発なやりとりが続くなど有意義

な討論となりました。



開会挨拶を行う細井学長



総合討論の様相

漢方薬シンポジウム2014を開催しました

11月1日(土)に奈良県文化会館国際ホールにおいて奈良県と本学の共催による「漢方薬シンポジウム2014」を開催しました。

このシンポジウムは、今回で3回目の開催で、薬草や漢方薬に関するシンポジウムを開催することで広く県民に漢方の普及・啓発を行うことを目的としています。

今回は、「糖尿病と漢方」～糖尿病治療の最前線と漢方の考え～西洋医学と東洋医学のスクラムで日本の医療を世界最高水準に～をテーマに、本学糖尿病学講座 石井均教授から「糖尿病治療の考え方とその最前線」、と題した講演をいただき、パネルディスカッションでは本学 大和漢方医学薬学センターの三谷和男特任教授をコーディネーターに、講演いただいた石井教授に加え、薬剤師でもある奈良県手をつなぐ育成会の小西英玄理事長、看護師の立場から本学附属病院 糖尿病セ

ンター 鶴山美樹看護師、栄養士の立場から奈良市立奈良病院栄養室の野坂雄治室長、理学療法士の立場から社会福祉法人恩賜財団済生会奈良病院リハビリテーション部の柘岡佳樹技師長、医師の立場から三谷ファミリークリニックの巽欣子副院長に参加いただき、巽副院長からの漢方処方を行った症例提供を基にして、それぞれの立場から活発な議論をいただきました。

閉会挨拶を行った細井理事長は「今後とも本事業の発展に取り組んでいきたい。」と締められました。

会場には約600人も多数の参加者があり、漢方への関心の高さを伺うことができました。



シンポジウムの様子

平成26年度 外部資金獲得状況

89件 215,763,467円 (間接経費を含む) (平成26年11月30日現在)

※文部科学省科学研究費助成事業を除く

(1) 平成26年度厚生労働科学研究費補助金

① 研究代表者

研究事業名	所属	職名	氏名	研究課題名
食品の安全確保推進研究事業	健康政策医学	教授	今村 知明	食品防御の具体的な対策の確立と実行検証に関する研究
政策科学総合研究事業 (政策科学推進研究事業)	健康政策医学	教授	今村 知明	医療情報の活用のための疾病及び関連保健問題の国際統計分類のあり方に関する研究
創薬基盤推進研究事業	化学	教授	酒井 宏水	人工赤血球(ヘモグロビン小胞体)製剤の実用化を目指す研究
厚生労働科学特別研究事業	健康政策医学	教授	今村 知明	薬価算定基準(原価計算方式)における平均的利益率の補正率の定量的算出法及び特定保険医療材料の保険償還価格算定の基準における定量的評価に係る研究

② 研究分担者

研究事業名	所属	職名	氏名	研究課題名	研究代表者
医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業(医薬品等規制調和・評価研究事業)	輸血部	教授	松本 雅則	科学的根拠に基づく輸血ガイドラインの策定等に関する研究	名古屋大学 松下 正
医療技術実用化総合研究事業(早期探索的国際水準臨床研究事業)	産学官連携推進センター	特任教授	平尾 佳彦	標準的治療の確立が望まれる難治性疾患に対する新規治療法の開発	九州大学病院 中西 洋一
医療技術実用化総合研究事業(早期探索的国際水準臨床研究事業)	泌尿器科学	教授	藤本 清秀	標準的治療の確立が望まれる難治性疾患に対する新規治療法の開発	九州大学病院 中西 洋一
エイズ対策研究事業(エイズ対策政策研究事業)	小児科学	教授	嶋 緑倫	血友病とその治療に伴う合併症の克服に関する研究	自治医科大学 坂田 洋一
エイズ対策研究事業(エイズ対策実用化研究事業)	健康管理センター	准教授	古西 満	ART早期化と長期化に伴う日和見感染症への対処に関する研究	市立大村市民病院 安岡 彰
再生医療実用化研究事業	整形外科	教授	田中 康仁	間接鏡視下自己骨髄間葉系幹細胞移植による間接軟骨欠損修復～多施設共同、非盲検、ランダム化、並行比較試験	武庫川女子大学 脇谷 滋之
循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業	救急医学	教授	奥地 一夫	脳卒中急性期医療の地域格差の可視化と縮小に関する研究	九州大学 飯原 弘二
障害者政策総合研究事業(精神障害分野)	精神医学	助教	池下 克実	自殺対策のための効果的な介入手法の普及に関する研究	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター 山田 光彦
障害者政策総合研究事業(障害者政策総合研究事業(精神障害分野))	精神医学	博士研究員	森川 将行	新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター 竹島 正
障害者政策総合研究事業(障害者政策総合研究事業(身体・知的等障害分野))	健康政策医学	講師	野田 龍也	難病のある人の福祉サービス活用による就労支援についての研究	国立障害者リハビリテーションセンター 深津 玲子
食品の安全確保推進研究事業	健康政策医学	教授	今村 知明	新開発バイオテクノロジー応用食品の安全性確保並びに国民受容に関する研究	国立医薬品食品衛生研究所 手島 玲子
食品の安全確保推進研究事業	健康政策医学	准教授	赤羽 学	食品防御の具体的な対策の確立と実行検証に関する研究	奈良県立医科大学 今村 知明
食品の安全確保推進研究事業(カネオ三油症に関する研究)	健康政策医学	准教授	赤羽 学	食品を介したダイオキシン類等の人体への影響の把握とその治療法の開発等に関する研究	九州大学 古江 増隆
新型インフルエンザ等新興・再興感染症研究事業(新興・再興感染症及び予防接種政策推進研究事業)	感染症センター	講師	笠原 敬	成人の重症肺炎サーベイランス構築に関する研究	国立感染症研究所 大石 和徳
創薬基盤推進研究事業	第二生理学	教授	堀江 恭二	創薬・疾患研究のための細胞・組織コレクション供給体制確立に関する研究	独立行政法人 医薬基盤研究所 小原有弘
創薬基盤推進研究事業	分子病理学	教授	國安 弘基	Claudinを標的とした創薬基盤技術の開発	国立大学法人 大阪大学 近藤 昌夫
地域医療基盤開発推進研究事業	健康政策医学	講師	野田 龍也	救急医療体制の推進に関する研究	一般財団法人 救急復興財団 山本 保博
認知症対策総合研究事業	精神医学	准教授	安野 史彦	BPSDの症状評価法および治療法の開発と脳内基盤解明を目指した総合的研究	筑波大学 新井 哲明
難治性疾患等実用化研究事業(難治性疾患実用化研究事業)	第三内科学	特任教授	藤村 吉博	血栓性血小板減少性紫斑病に対するリツキシマブの第Ⅱ相医師主導試験	埼玉医科大学病院 宮川 義隆
難治性疾患等実用化研究事業(難治性疾患実用化研究事業)	輸血部	教授	松本 雅則	血栓性血小板減少性紫斑病に対するリツキシマブの第Ⅱ相医師主導試験	埼玉医科大学病院 宮川 義隆
難治性疾患等実用化研究事業(難治性疾患実用化研究事業)	総合医療学	教授	西尾 健治	血栓性血小板減少性紫斑病に対するリツキシマブの第Ⅱ相医師主導試験	埼玉医科大学病院 宮川 義隆
難治性疾患等政策研究事業(難治性疾患政策研究事業)	第三内科学	特任教授	藤村 吉博	血液凝固異常症等に関する研究	慶應義塾大学 村田 満
難治性疾患等政策研究事業(難治性疾患政策研究事業)	第三内科学	特任教授	藤村 吉博	非典型型血性尿毒症候群(aHUS)の全国調査研究	東京大学医学部附属病院 南学 正臣
難治性疾患等政策研究事業(難治性疾患政策研究事業)	第一内科学	教授	斎藤 能彦	特発性心筋症に関する調査研究	北海道大学 筒井 裕之
難治性疾患等政策研究事業(難治性疾患政策研究事業)	第二内科学	教授	木村 弘	呼吸不全に関する調査研究	千葉大学大学院医学研究院 巽 浩一郎
難治性疾患等克服研究事業(難治性疾患等政策研究事業(難治性疾患政策研究事業))	神経内科学	教授	上野 聡	スモンに関する研究調査	独立行政法人 国立病院機構鈴鹿病院 小長谷 正明
難治性疾患等政策研究事業(難治性疾患政策研究事業)	神経内科学	准教授	杉江 和馬	希少難治性筋疾患に関する調査研究	東北大学 青木 正志
難治性疾患等政策研究事業(難治性疾患政策研究事業)	小児科学	教授	嶋 緑倫	新生児・小児における特発性血栓症の診断、予防および治療法の確立に関する研究	山口大学 大賀 正一
難治性疾患等政策研究事業(難治性疾患政策研究事業)	新生児集中治療部	教授	高橋 幸博	新生児・小児における特発性血栓症の診断、予防および治療法の確立に関する研究	山口大学 大賀 正一
難治性疾患等政策研究事業(難治性疾患政策研究事業)	皮膚科学	教授	浅田 秀夫	慢性活動性EBウイルス感染症とその類縁疾患の診療ガイドライン作成と患者レジストリの構築	名古屋大学 木村 宏

平成26年度 外部資金獲得状況

研究事業名	所属	職名	氏名	研究課題名	研究代表者
難治性疾患等政策研究事業 (難治性疾患政策研究事業)	皮膚科学	教授	浅田 秀夫	重症多形滲出性紅斑に関する調査研究	杏林大学 塩原 哲夫
難治性疾患等政策研究事業 (難治性疾患政策研究事業)	整形外科	教授	田中 康仁	早老症の実態把握と予後改善を目指す集学的研究	千葉大学 横手 幸太郎
難治性疾患等政策研究事業 (難治性疾患政策研究事業)	耳鼻咽喉・頭頸部 外科学	教授	北原 紘	難治性平衡機能障害に関する研究調査	徳島大学 武田 憲昭
厚生労働科学特別研究事業	健康政策医学	講師	野田 龍也	薬価算定基準(原価計算方式)における平均的利益率の補正率の定量的算出法及び特定保険医療材料の保険償還価格算定の基準における定量的評価に係る研究	奈良県立医科大学 今村 知明
厚生労働科学特別研究事業	第一内科学	教授	斎藤 能彦	臨床効果データベースの構築状況の実態把握及び効率的な整備・運用方法に関する研究	東京大学 山本 隆一

(2) 厚生労働科学研究委託費

研究事業名	所属	職名	氏名	研究課題名	主任研究者名等
革新的がん医療実用化研究事業	放射線医学	准教授	穴井 洋	最新のIVRによる症状緩和についての研究	国立がん研究センター中央病院 荒井 保明
循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策実用化研究事業	第一内科学	教授	斎藤 能彦	慢性心不全患者における心不全再入院予測モデルの構築と治療法の標準化に関する研究	国立循環器病研究センター 北風 政史
障害者対策総合研究事業(障害者対策総合研究開発事業(精神障害分野))	看護学科 人間発達学	教授	飯田 順三	発達障害を含む児童・思春期精神疾患の薬物治療ガイドライン作成	弘前大学 中村 和彦
難治性疾患等克服研究事業(難治性疾患等実用化研究事業(難治性疾患実用化研究事業))	第一内科学	教授	斎藤 能彦	遺伝性心血管疾患における集中的な遺伝子解析及び原因究明に関する研究	大阪大学 高島 成二
循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策実用化研究事業	第一内科学	教授	斎藤 能彦	日本人糖尿病の合併症重症度評価パネルの確立と重症化予防の為に効果的医療連携体制の構築	独立行政法人 国立病院機構 京都医療センター 浅原 哲子
循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策実用化研究事業	眼科学	教授	緒方奈保子	日本人糖尿病の合併症重症度評価パネルの確立と重症化予防の為に効果的医療連携体制の構築	独立行政法人 国立病院機構 京都医療センター 浅原 哲子
循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策実用化研究事業	糖尿病学	教授	石井 均	日本人糖尿病の合併症重症度評価パネルの確立と重症化予防の為に効果的医療連携体制の構築	独立行政法人 国立病院機構 京都医療センター 浅原 哲子

(3) 公益社団法人 日本医師会 治験促進センター

研究事業名	所属	職名	氏名	研究課題名	主任研究者名等
治験推進研究事業	第一内科学	教授	斎藤 能彦	治験の実施に関する研究【エプレレノン】	公益社団法人 日本医師会 治験促進センター 中川 俊男
治験推進研究事業	眼科学	教授	緒方奈保子	治験の実施に関する研究【アリアントブルー G250】	公益社団法人 日本医師会 治験促進センター 中川 俊男

(4) 独立行政法人 国立循環器病研究センター

研究事業名	所属	職名	氏名	研究課題名	主任研究者名等
循環器病研究開発費	第一内科学	教授	斎藤 能彦	糖尿病患者における心血管疾患予防の最適化に関する研究	独立行政法人 国立循環器病研究センター 小川 久雄
循環器病研究開発費	第一内科学	教授	斎藤 能彦	奔放におけるHEpEFの実態に関する多施設共同調査研究	独立行政法人 国立循環器病研究センター 安齊 俊久
循環器病研究開発費	精神医学	准教授	安野 史彦	心血管リスクに伴う認知症発症機序の解明とその解決	独立行政法人 国立循環器病研究センター 猪原 匡史

(5) 総務省

研究事業名	所属	職名	研究担当者	研究課題名
戦略的情報通信研究開発推進事業(SCOPE)	産婦人科学	教授	小林 浩	循環器疾患患者を対象とした在宅ヘルスケア・システムの研究開発

(6) 経済産業省

研究事業名	所属	職名	研究担当者	研究課題名
医工連携事業化推進事業	耳鼻咽喉・頭頸部 外科学	助教	西村 忠己	新構造の振動子を用いた世界初の軟骨伝導による補聴器の開発
医工連携事業化推進事業	産学官連携推進 センター	特任教授	平尾 佳彦	在宅排尿機能検査の基盤になる携帯式尿流量率計の市場化開発事業
ものづくり中小企業・小規模事業者 試作開発等支援事業	産婦人科学	教授	小林 浩	妊婦健康管理(見守り)システムの臨床テスト事業
戦略的基盤技術高度化支援事業	整形外科 兼 スポーツ医学 (寄附講座)	学内講師	小川 宗宏	膝回旋不安定性の非侵襲的かつ簡便な定量化技術の開発
中小企業・小規模事業者ものづくり・ 商業・サービス革新事業	分子病理学	教授	國安 弘基	磁気発熱体の抗腫瘍効果の評価

(7) 文部科学省

研究事業名	所属	職名	研究担当者	研究課題名
地域産学官連携科学技術振興事業費補助金(イノベーションシステム整備事業)地域イノベーション戦略支援プログラム(国際競争力強化地域)「けいはんな学研都市ヘルスケア開発地域」	産学官連携推進 センター	特任助手	刀根 庸浩	MEMSを用いた無拘束生体計測基盤技術(新たな生体測定・診断システム)の開発

平成26年度 外部資金獲得状況

(8) 独立行政法人 科学技術振興機構

研究事業名	所属	職名	研究担当者	研究課題名
研究成果展開事業 研究成果最適展開支援プログラム シーズン在化(平成25年度採択)	耳鼻咽喉・頭頸部外科学	特任講師	和田 佳郎	フワフワ感の解消を目指した“傾斜感覚適性化装置”の開発
研究成果展開事業 研究成果最適展開支援プログラム ハイリスク挑戦タイプ(復興促進型)(平成26年度採択)	産婦人科学	教授	小林 浩	微量元素をマーカーとする子宮内膜症の悪性を早期に予測する方法の確立
研究成果展開事業 研究成果最適展開支援プログラム 産学共同促進ステージ ハイリスク挑戦タイプ(平成26年度採択)	耳鼻咽喉・頭頸部外科学	特任講師	和田 佳郎	耳石器(重力センサ)が原因のめまいを診断する平衡機能検査装置の開発
研究成果展開事業 研究成果最適展開支援プログラム A-STEP	地域健康医学	講師	佐伯 圭吾	体位センサーを搭載したアクチグラフ睡眠計・自由行動下血圧計の開発
研究成果展開事業 研究成果最適展開支援プログラム A-STEP	耳鼻咽喉・頭頸部外科学	助教	下倉 良太	軟骨伝導を活用した会話を妨げないアクティブノイズコントロールの開発

(9) 独立行政法人 宇宙航空研究開発機構

研究事業名	所属	職名	研究担当者	研究課題名
宇宙環境利用科学委員会 WG/RT	放射線腫瘍医学	博士研究員	大西 武雄	きぼうにおける宇宙生命科学研究計画

(10) 奈良県

研究事業名	所属	職名	研究担当者	研究課題名
奈良県自殺未遂者支援・調査事業	精神医学	教授	岸本 年史	自殺未遂者等に心理教育を実施し、退院後に問題解決を図るために適切な社会資源と連携するケースマネジャーを養成し、再発を防止する

(11) 奈良県 明日香村

研究事業名	所属	職名	研究担当者	研究課題名
地域医療連携事業	地域健康医学	教授	車谷 典男	あすか健康プロジェクト48
地域医療連携事業	精神看護学	教授	軸丸 清子	あすか健康プロジェクト48

(12) 三重県 名張市

研究事業名	所属	職名	研究担当者	研究課題名
伊賀・奥宇陀地域脳神経疾患医療体制整備に関する調査事業	脳神経外科学	教授	中瀬 裕之	伊賀・奥宇陀地域脳神経疾患医療体制整備に関する調査

(13) その他 財団法人等

団体名等	所属	職名	氏名	研究課題名
旭化成ファーマ株式会社	泌尿器科学	大学院生	松下 千枝	高齢者睡眠の質向上を目指す研究～交感神経活動による排尿症状・睡眠障害関連の証明～
(公財) LIXIL 住生活財団	耳鼻咽喉・頭頸部外科学	助教	下倉 良太	難聴者にとって言葉を聞き取りやすい住環境設計に関する基礎研究
(公財) 先進医薬研究振興財団	精神医学	助教	牧野段 学	発達障害におけるオリゴデンドロサイト機能とシナプス形成
(公財) 内藤記念科学振興財団	生理学第二	教授	堀江 恭二	パーコード定量システムを用いたES細胞の多能性のフォワードジェネティクス解析
(公財) 乙卯研究所	精神医学	准教授	安野 史彦	タミバロテンのアルツハイマー型認知症に対する探索的臨床試験
(公財) 第一三共生命科学研究振興財団	生理学第二	教授	堀江 恭二	変異ES細胞ライブラリーの分化誘導による細胞系譜決定因子の探索
(公財) 神澤医学研究振興財団	産婦人科学	助教	成瀬 勝彦	妊娠合併症の成因に関わるアディポサイトカインと自然炎症因子動態のゲノムワイド解析
(公財) ノバルティス科学振興財団	生理学第二	教授	堀江 恭二	ES細胞多能性制御ネットワークの遺伝学的解析
(公財) 整形災害外科学研究助成財団	整形外科(再建医学)	大学院生	吉良 務	低酸素処理細胞シートを用いた皮膚・皮弁血流改善技術の確立
資生堂	皮膚科学	助教	宮川 史	SLEの発症機序に対するIRF7転写因子の役割の解明
認定特定非営利活動法人日本IDDMネットワーク(1年目)	消化器・総合外科学	講師	山田 高嗣	iPS腸管(iGut)を用いた膵臓(iPanc)の臓器分化誘導法の開発
パクスター株式会社	小児科学	大学院生	古川 晶子	凝固初期相での活性型VII因子/組織因子のVIII因子活性化に基づく凝固機序の解明と新規血友病治療への応用
(一財) 日本健康開発財団	健康政策医学	大学院博士課程	加藤 礼織	湯治目的の重症患者が集う温泉地と地域医療体制の協調に関する研究
(公財) 大阪難病研究財団	耳鼻咽喉・頭頸部外科学	医員	阪上 雅治	メニエール病の内耳における発症因子に関する研究
(公財) 日本応用酵素協会	内科学第一	診療助教	松井 勝	慢性腎臓病における可溶性F1t-1による動脈硬化抑制機序に関する検討
パクスター株式会社	法医学	助教	粕田 承吾	ADMATS13によるVWF依存性炎症反応制御機構の解明
(公財) 武田科学振興財団	精神医学	助教	鳥塚 通弘	iPS細胞を用いた培養・移植実験系による一卵性双生児統合失調症不一致例解析
アストラゼネカ株式会社	糖尿病学	教授	石井 均	糖尿病を原因とし透析導入に至った患者の治療経過に関する研究
(公財) 先進医薬研究振興財団「平成26年度(第33回)循環器医学分野一般研究助成」	脳神経システム医科学	教授	坪井 昭夫	成体脳における神経回路の恒常性維持機構の解明と脳神経疾患治療法の創出
(公財) 先進医薬研究振興財団「平成26年度(第33回)血液医学分野一般研究助成」	小児科学	准教授	野上 恵嗣	凝固第V因子関連血栓症の凝血的評価と血栓発症機序の基礎研究
(公財) 先進医薬研究振興財団「平成26年度(第33回)血液医学分野一般研究助成」	血栓制御医学	講師	松井 英人	DNAトランスポゾンベクターによる次世代型血友病遺伝子細胞治療法の確立
(公財) 先進医薬研究振興財団「平成26年度(第8回)精神薬療分野野手研究助成」	精神医学	助教	鳥塚 通弘	iPS細胞を用いた培養・移植実験系による一卵性双生児統合失調症不一致例解析

部門紹介

C病棟7階（循環器・腎臓・代謝内科病棟）

C病棟7階は循環器・腎臓（膠原病・リュウマチ疾患含む）・代謝内科（糖尿病・脂質異常症・高尿酸血症など）で病床数60床の病棟です。

高齢で日常生活援助を必要とし重症度・ADL支援を要する患者さんが多く、急性期から回復期・周手術期・慢性期・終末期まですべての領域の看護を実践している病棟です。

急性心筋梗塞や狭心症など心臓カテーテル治療後の急性期全身管理から心臓リハビリテーション、慢性期・終末期の心不全コントロール、糖尿病・インシュリン導入目的や腎疾患の教育入院など幅広く、生活習慣病に関連した疾病が多いため、1人1人の生活背景から退院後の生活を見据え、他職種や専門チームと連携を図りながら患者さんや家族に「寄り添う看護」を提供しています。

糖尿病・集中ケア認定看護師も在籍し、所属内でシミュレーション研修などの学習会を行い、質の高い看護の提供ができるよう人材育成に関わっています。また男性看護師

も6名在籍し職場の雰囲気も良く、和気藹々と楽しく助け合いながら看護実践しています。

時には厳しく辛い事や嬉しい事もありますが、人生の先輩である患者さんから学ぶ事もたくさんあり日々成長を実感しています。“生き生きと働ける職場づくり”を医師・他職種と協力・連携し、日々切磋琢磨しながら患者さんの治療・ケアに取り組んでいます。



C病棟8階（呼吸器内科・感染制御内科）

C病棟8階は呼吸器内科・感染制御内科の混合病棟です。

呼吸器内科では肺癌の患者さんが最も多く、長期間続く化学療法と闘いながら精神的な支援を行うことが看護師の役割として重要です。若い看護師から「がん看護専門看護師」・「がん化学療法認定看護師」などのスペシャリストも交えて、患者さん・家族のサポート役として日々悩みながら患者さんにとってどのように援助していくことがいいか、みんなで話し合う風土を大切にしています。

また呼吸器疾患のため冬の間は体調をくずされる患者さんが多く、緊急入院も多くなります。しかしそんな複雑な現場の中でもスタッフ一同、助け合う精神が強くチームの団結力が素晴らしいです。

感染制御内科では一般内科と違い海外発症の感染症や、エボラ出血熱、毎年流行するインフルエンザ患者の対応が

求められます。また県の拠点病院としてHIV感染患者の受け入れなど年齢、性別、時期を問わず多岐にわたるケアが必要で、大きな役割を担っています。

いつも明るく患者さんに寄り添い、少しでも安心して安らかな療養生活が送れるように考えながら日々看護する努力を惜しまないスタッフ達です。



精神医療センター

精神医療センターは1階の外来・デイケア・医局と2階・3階の病棟に分かれており、現在病床数は3階50床、2階40床です。病床稼働率は2階が96%、3階が89%と院内で3番目に高く、また、近年精神科疾患の多様化から外来には1日に400人を超える患者さんが来られます。

精神科はチーム医療が重要で、医師を中心に看護師、精神保健福祉士、作業療法士、臨床心理士、薬剤師など多職種同士の連携を常に持ちながら患者さんの支援に携わっています。病棟では心理教育の実施やレクリエーションを通して精神科リハビリテーションを企画したり、また入院時から患者さんの社会復帰に繋げるよう、退院支援チームで活動。退院が近い患者さんには、実際に自宅を訪問し生活環境を含めた退院前指導も行っています。

精神科では身体的管理は勿論、直接目には見えない“心”の問題をケアすることが重要です。入院中は患者さんの一

番身近な存在として“心”に寄り添う医療・看護を目指して日々頑張っています。また入院中の患者さんに楽しい思い出作りをして頂こうと季節の行事も大切に、春の花見、夏の盆踊り、冬のクリスマス会などスタッフと患者さんが一緒に盛り上がることも…医療チーム一丸となって和気あいあいと患者さんに喜んで頂けるよう頑張っています。



公開講座『くらしと医学』開催のお知らせ

平成 26 年度後期公開講座『くらしと医学』を下記のとおり開催します。

申込み・受講料共に不要ですので、皆様お誘い合わせの上、ぜひご聴講ください。

日時：平成 27 年 3 月 14 日 (土) 13 時～15 時 30 分

場所：奈良県文化会館 国際ホール (奈良市登大路町 6-2)

プログラム：

● **病原体・感染防御医学 教授 吉川 正英**

「寄生虫今昔物語」

概要：寄生虫症って、もう昔の病気でしょう？いえ、いえ、そうではありません。昔あった「昭和までの寄生虫症」は、ほとんど無くなりました。しかし、現代には「平成の寄生虫症」があります。たぶん未来には未来の寄生虫症が、きっとあるでしょう。

● **放射線腫瘍医学 教授 長谷川 正俊**

「最先端の放射線治療でがんを切らずになおす」

概要：二人に一人ががんになり、三人に一人ががんで死亡しています。治療法には手術、放射線治療、抗がん剤などがありますが、最近は放射線治療の果たす役割が大きくなり、患者さんも増加しています。切らずになおすので、身体への影響が少なく、高齢者でも治療できます。特に最先端の放射線治療では、正確にがんを集中的に治療することが可能です。

● **母性看護学 教授 脇田 満里子**

「みんなで支える子育て、孫育て」

概要：今日、急速に少子化が進み、晩婚化、育児の孤立化、育児不安や虐待の増加等、育児を取り巻く環境は様々な課題に直面しています。そこで「命の誕生」のすばらしさを再確認し、特にシニア世代による子育て支援について紹介し、多世代および地域社会や職場が子育て世代を支えることの重要性を述べたいと思います。

<http://www.naramed-u.ac.jp/info/openlecture.html>

レポート

第 15 回 役員会 (10 月 1 日)

- 1 教育研究審議会予定案件を承認
 - (1) 独立行政法人産業技術総合研究所との連携・協力に関する協定締結について
 - (2) 大学院看護学研究科修士課程長期履修制度の導入について
 - (3) 教員の人事について
 - (4) 教授選考に係る教育研究審議会への諮問について
- 2 事務組織規程の一部改正を承認
- 3 職の設置に関する規程の一部改正を承認
- 4 看護職員採用試験において一般 4 名の合格者を決定

第 8 回 教育研究審議会 (10 月 2 日)

- 1 基礎看護学教授候補者として松田明子氏を決定し、役員会に答申
- 2 教員の人事について、11 月 1 日付け昇任、11 月 30 日付け退職を審議
- 3 独立行政法人産業技術総合研究所との連携・協力に関する協定の締結を審議
- 4 臨床教授等の称号付与を審議
- 5 大学院看護学研究科修士課程長期履修制度の導入を審議
- 6 教授選考 (英語、内科学第三) について役員会から諮問があったことを報告
- 7 平成 25 年度業務の実績に関する評価結果を報告

第 16 回 (臨時) 役員会 (10 月 2 日)

- 1 教育研究審議会の審議結果を審議・決定

第 17 回 役員会 (10 月 22 日)

- 1 教育研究審議会予定案件を承認
 - (1) 教授候補者の選考に係る基本方針 (案) について
- 2 平成 27 年度の県に対する予算要望を承認
- 3 看護職員採用試験において合格者なしと決定

第 18 回 役員会 (11 月 5 日)

- 1 教育研究審議会予定案件を承認
 - (1) 教員の人事について
- 2 入退院管理センターの設置を承認
- 3 職員採用試験において事務職 11 名、機械職 1 名、建築職 1 名の合格者を決定

第 9 回 教育研究審議会 (11 月 6 日)

- 1 教員の人事について、12 月 1 日付け採用を審議
- 2 教授選考 (英語、内科学第三) にかかる基本方針を審議

第 19 回 (臨時) 役員会 (11 月 6 日)

- 1 教育研究審議会審議結果を審議・決定

第 20 回 役員会 (11 月 19 日)

- 1 教育研究審議会予定案件を承認
 - (1) 特任教員配置申請及び特任教員の人事について
 - (2) 病原体・感染防御医学講座、微生物感染症学講座、免疫学講座の教員定数の配置について
- 2 なかよし保育園を民間委託することについて承認
- 3 短時間勤務制度の拡充 (ワークライフバランスの推進) を承認
- 4 平成 26 年度給与改定を承認
- 5 情報セキュリティ及び危機管理の推進状況を報告
- 6 開学 70 周年記念事業の概要を報告

第 21 回 役員会 (12 月 3 日)

- 1 教育研究審議会予定案件を承認
 - (1) 教員の人事について
 - (2) 特任教員配置申請及び特任教員の人事について
 - (3) 任期制教員の再任審査について

- 2 平成 27 年度予算編成方針の骨子 (案) を承認
- 3 平成 26 年度給与改定及び短時間勤務制度に係る規程改正を承認
- 4 病院規程の一部改正を承認
- 5 看護職員採用試験において一般 3 名の合格者を決定
- 6 平成 26 年度決算見通しを報告

第 10 回 教育研究審議会 (12 月 4 日)

- 1 母性看護学教授候補者として、五十嵐稔子氏を決定し、役員会に答申
- 2 教員の人事について、12 月 31 日付け退職、1 月 1 日付け採用、1 月 1 日付け昇任を審議
- 3 特任教員配置申請及び特任教員の人事について、耳鼻咽喉・頭頸部外科学 特任講師に和田佳郎氏、放射線腫瘍医学 特任助教に井上正義氏の配置を審議
- 4 1 月 31 日付けで任期満了となる任期制教員のうち再任申出のあった助教 1 名の再任を審議
- 5 病原体・感染防御医学講座、微生物感染症学講座、免疫学講座の教員定数の配置を審議

第 22 回 (臨時) 役員会 (12 月 4 日)

- 1 教育研究審議会審議結果を審議・決定

第 23 回 役員会 (12 月 17 日)

- 1 教育研究審議会予定案件を承認
 - (1) 看護学科における領域の新設ならびに教員定数の配置について
 - (2) 診療助教制度に関する実施要領の改正について
 - (3) 教員の人事について
- 2 職員採用試験において言語聴覚士 1 名、視能訓練士 1 名の合格者を決定

メディア掲載情報をお寄せください～学報紙面で紹介します～

新聞・雑誌・テレビ等マスコミの取材、テレビ出演、記事を掲載された教職員・学生をこの「学報」紙面で紹介します。

掲載者	掲載メディア	掲載概要
大崎 茂芳 特任教授 (皮膚科)	読売新聞 2014年9月28日	「クモの糸から未来の素材」 最近、世界的に注目されているクモの糸の量産化に関して、多くの人が興味を持つようになったクモの糸の独特な性質を世界に先駆けて見出した研究成果についての報道。
	週刊新潮 2014年10月9日	「小淵経産相を引き寄せた新素材の実用性」
	NHK総合テレビ「サキどり」 2015年1月25日(日)	夢の繊維と言われるクモの糸がユニークな性質の繊維であることを具現化した私の研究成果を紹介し、次に、絹産業遺産が世界遺産に認定されたことから、カイコの遺伝子組み換えによってクモの糸の量産化を目指す研究開発の可能性を紹介し、衰退気味の絹糸産業をクモの糸で活性化しようとする意気込みです。
今村 知明 教授 (健康政策医学)	読売新聞 朝刊 2014年10月9日(木)	杉並の区立小中全校で給食、中国産食材 不使用した件について、食品防御の識者としてのコメントが掲載された。
	MEDIFAX(株式会社じほう) 2014年10月17日(金)	医療提供調査など報告 介護給付費分科会・改定検証委の記事でコメントが掲載された。
坪井 昭夫 教授 (脳神経システム医学)	読売新聞 朝刊 2014年11月9日(日)	本学の紹介欄「うちの自慢」において、「研究医養成コース」として本講座に配属している早大出身の朝比奈諒君(4年生)が、最新鋭の共焦点レーザー顕微鏡を駆使して、マウスを用いて脳梗塞の治療法を模索する研究を行っていることが紹介された。
吉治 仁志 准教授 (消化器・内分泌代謝内科)	ABCラジオ「健やかライフ」 2014年11月17日～11月21日	肝臓がんについて、原因や治療法・予防対策を視聴者にわかりやすく解説した。
岡本 佐和子 講師 (健康政策医学)	毎日新聞 朝刊 2014年11月27日(木)	今年10月から施行される医療事故調査制度について、医療従事者と患者さん・家族双方の思いの紹介や、米国での経験をふまえてコラムを書いている。

学報バックナンバーは web サイト上でもご覧いただけます。
(<http://www.narmed-u.ac.jp/info/introduction/magazine.html>)

掲 示 板

古都奈良に早春を告げる伝統行事「若草山焼き」が、1月24日(土)に開催されます。

総勢40人の時代行列により、春日大社のご神火が若草山の麓の野上神社へ運ばれ、山焼きの無事を祈願する祭儀が厳かに執り行われます。大花火打ち上げ後、一斉に点火され、約33haの芝生に覆われた全山が瞬く間に炎に包まれます。冬の夜空に山全体が浮かび上がる様子は壮観です。若草山焼き行事の起源には諸説ありますが、若草山頂にある前方後円墳の靈魂を鎮めるといふ説、領地争いがもとである説や、春の芽生えを良くするための原始的な野焼きの遺風を伝えたといふ説もあるようです。

まだまだ寒い日が続きますが、若草山焼きに春の訪れを感じに行ってみませんか。

看護部 教育支援室

編集後記

新年明けましておめでとうございます。今年は羊年、干支は乙未(きのとひつじ)です。「乙」は、種が地中で発芽の時期を待つ様子を示し、「未」は、木がまだのびきらない状態を表します。「羊」は、象形文字で前から見た羊の形であり、羊角の後ろに羊身をかきます。めでたく、よい姿をしたものの象徴とされ、「養・善・義・美」などの字に含まれます。白川静の字統によれば、羊は神事に用いることが多く、羊神判(ようしんぱん)によって祥・不祥を定めることがあったとされています。今年(乙未)は、きよらかに美しい羊のような心をもった人間として成長したいと思います。個々の成長が本学の成長につながるものと信じています。

○岸本 年史(精神医学) 山名香奈美(母性看護学) 吉田 一良(病院管理課)
藤本 雅文(物理学) 錦 三恵子(看護部) 森田 英之(総務課・広報室)
京谷 陽司(薬理学) 藤谷 威行(研究推進課) 阪田 聖基(総務課・広報室)
藤本 正男(内科学第三) 永井 淳(教育支援課) (○印は編集委員長)